資　料

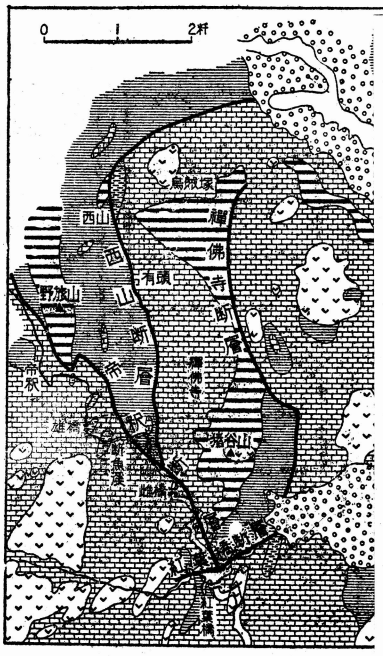
帝釈峡ひとり歩きの記

藤　田　　光　（長崎南高）

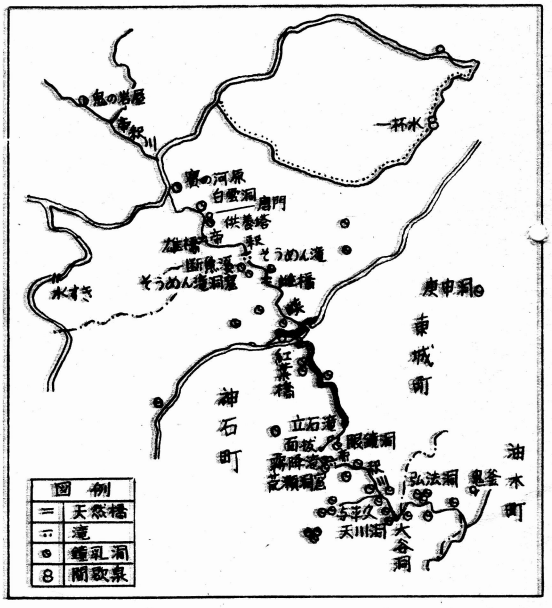
久しい福岡の地での生活に別れを告げ，今春4月より長崎南高で地学を語り学んでいるわけだが，8月に入り幾らか自由の身になったので私はひとり旅にでかけていった。旧友のいる広島県府中市へ。そして折角の機会だからと帝釈の自然を訪ねることにした。これは“地質巡検印象記”と云った程度のもの故に，本格的には来年夏に調査研究してみたいと希っている。

帝釈峡（たいしゃく）附近の地質概観

帝釈峡は，日本四大名峡の一つとして大正12年名勝に指定された地域で，帝釈川の流域神石・比婆の両郡に亘る延長18Kmの峡谷の総称である。附近一帯は石灰岩であり，太古からの絶え間なき風雨の浸蝕作用により自然橋である雄橋，雌橋を抱蔵し連続する千仞の絶壁は千古不伐の老樹に覆われてその間に，大洞窟・洞門・カルスト・ドリーネ・ポリーエ等散在し学術的に興味深い地帯をなしている。次に望月央氏による帝釈台地質図，藤本治義氏による帝釈台の準秋吉層群の分帯表並びに帝釈峡の天然橋鐘乳洞などの分布図を示しておく。



第1図　帝釈台地質図（望月央氏による）



第2図　帝釈峡の天然橋・鐘乳洞などの分布

第1表　帝釈台の準秋吉層群の分帯

	藤本治義氏による
二畳紀後期	Sumatrina—Yabeina帯
二畳紀中間	Neoschwagerina　帯
二畳紀前期	Pseudodoliolina 帯
二畳紀初期	Schwagerina 帯
モスコウ世	Fusulinella 帯
ウイゼー世	Staffella, Nagatophyllum 帯

巡　検　記

第1日目——帝釈——マス池間（8月12日）

(I)　朝帝釈中学校を訪ね，校内の一室に設けられている帝釈郷土館を案内して貰い，次のようなこの地方の地学関係標本を観察する。

岩石鉱部

(a)　火成岩類……巨晶花崗岩，斑状黒雲母花崗岩，花崗斑岩，石英斑岩，珪岩，斑糲岩蛇紋岩，橄欖岩，橄欖玄武岩，きび土，石綿

(b)　堆積岩類……(イ)古生代堆積岩——石灰岩鮞状石灰岩，泥質石灰岩，含化石石灰岩，石灰岩礫岩，砂岩，頁岩，礫岩，チヤート輝緑凝灰岩，　(ロ)中生代堆積岩——赤色凝灰岩，　岩質角礫岩，流紋岩質凝灰岩　(ハ)新生代堆積岩——砂岩（含生物化石）

(c)　変成岩類……千枚岩，結晶質石灰岩（備後　砂）方解石，スカルン鉱物（ざくろ石，珪灰岩）

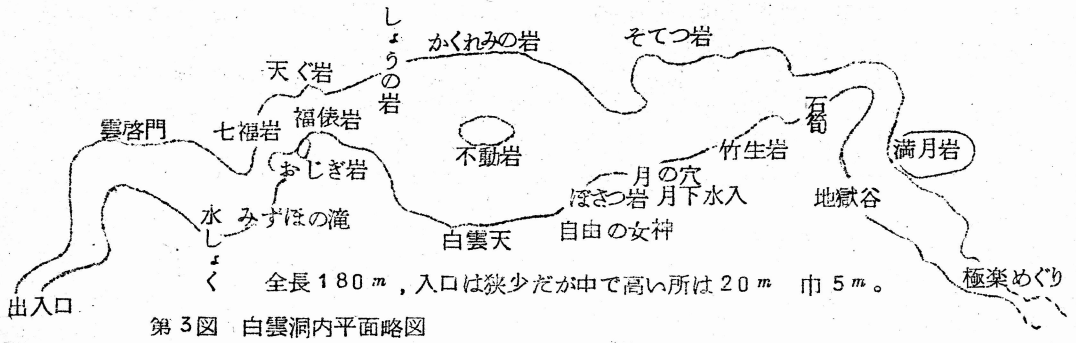
(d)　その他……クローム鉄鉱，マンガン鉱，ろう石，珪化木，鍾乳石

化　石

(a)　古生代化石……さんご類（Lonsdaloides, Chaetetes, Taishakuphyllum, Lithostorotionere, Cytophyllum, Clisaxophyllum, Stylidophyllum, Amygdalophyllum)

貝類その他　Squamularia, Martinia, Aviculopecten, Spirifer, Productiolae, Camarophoria, Marginifera, Richthofenia, Paleolucina, Algal, Bryozoa, 海ゆり紡錘虫類（Parafusulina, Pseudofusulina, Yabeina, Neoschwagerina, Sumatorina, Nankinella, Triticites, Fusulinella, Lepidolina etc

(II)　永明寺のある帝釈町部落を去り間もなく，峡谷に入ると鍾乳洞の白雲洞があり，大小無数の鍾乳石，石筍みられ変化に富む。洞内の平面略図を示しておく。



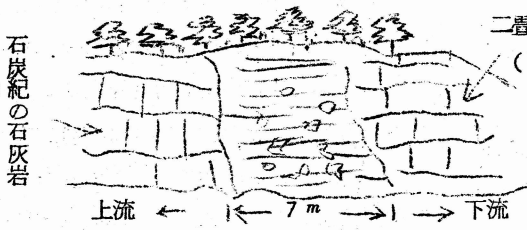
第3図　白雲洞内平面略図

(III) 更に下流へと歩を進めると河鹿橋と桂橋の間の川の両岸に石炭紀の石灰岩と暗褐色の輝緑凝灰岩の互層をみる。走向はほぼ南北で傾斜30°E。

(IV) 雌橋は石灰岩の天然橋で，巾12m，高さ30m，長さ65mのもので，これはスイスのブレビッシュ，北米のロックブリッジと共に世界三大橋の一つといわれている。

(V) 支流の名越川が帝釈川に注ぐところに河仁吾橋あり，それを過ぎて数分間下流へと歩く地点に断魚渓の石灰質輝緑凝灰岩の露頭に到達する。ここはかって藤本治義博士がヴィセアンのNagtophyllum, Thysanophyllum, Lithostrotion, Staffellaを発見され，帝釈峡に沿い北西，南東走向の有頭背斜のあること発表されし端緒をつくった地点である。サンゴ化石を含む輝緑凝灰岩を採集，かなり豊富に含んでいる。

(VI) 断魚渓からベニマス養殖場に向り道路は一部破壊されているので崖上を急造の道路がつくられているが，その部分を登り切ってやがて下り道になる地点の道路上2mの位置に断層破砕帯を認める。



第4図　黒色頁岩の断層破砕帯

第2日目（8月13日）マス池ー紅葉橋

(VII) ベニマス養魚場直下より下流へ100mの間に明瞭な層理面を有する黒色頁岩の露頭をみる。N10°W，30°E。

(VIII) そうめん橋より200m下流には石灰岩礫岩と頁岩との互層がみられN80E，50Nを記録。石灰岩礫岩の中には，Sumatrina annae VOLZ, Neoschwagerina douvillei OZAWAを含んでいる。

(IX) 雌橋附近には断層角礫岩がみられた。又神竜湖のえん堤上を通ずる道路横の石灰岩はOolitic limestoneである。

以上帝釈町から紅葉橋までの，まったくのかけ足歩きの観察スケッチである。化石，地質構造，層序と地学的に興味深い教材に恵まれたコースであることを，帝釈峡に遊ぶ多くの若いキャンパー達の果して幾人が認識している事かを考え乍ら府中行3時間余りのオンボロバスに乗った次第である。最後に粗略な報告であることをお詫びしたい。